

## 節約父ちゃん頑張れ。

俊野としの 英梨子えいりこ

いつも夜遅く帰って来て、ゲームや、テレビ見てたら「扇風機は弱、テレビの音量は15、使わない電源やコンセント抜く！」と、確認作業して回る、仕事柄細かい性格でうざく感じた私は、時々返事もしないでいた。そんな父ちゃんが、四月末に当直先の病院で緊急入院になった。そこでは手術できないから市内で一番大きな病院に転院させられてたくさん検査して手術になった。身体切ることになって、もし意識もどらんかったら二度と話できんけんと主治医の先生に「当直から入院してもう一週間顔見てない、このままになったら心残りだから、コロナで面会禁止わかるけど、手術前だけ一日あわして下さい。」姉ちゃん兄ちゃん母ちゃん四人で朝八時、手術の前にほんの数分だけの面会。姉兄と話して退院まであえんけん家で私が抱いて寝ているくまのぬいぐるみを渡した。病室置いて寂しい時三人の写真と一緒に見てやと言った。羨んだ父ちゃんが力なく笑ってくれた。母ちゃんは手術結果聞かないかんから残った。三人で病院を出た。高くそびえる病院の九階の西角部屋の窓にそのぬいぐるみは置かれていた。父ちゃん、頑張れと三人で手を合わせた。夜母ちゃんが帰宅して無事終わったこと、面会はコロナ感染症で自粛だから誰一人会えん事を聞かされた。なんで父ちゃんの事うざいと思っただんやろうか？一緒に遊んだりドライブ行ったり

思い出がばあつと頭の中いっぱいになった。何か父ちゃんに出来る事ないかなって三人寄れば文殊の知恵で考えた。看護師さんから連絡がきて着替えと携帯電話を父ちゃんに渡しに行った。その時も母ちゃんは看護師さんに手渡しして病院を出た。駐車場から九階の病室見たらくまのぬいぐるみが置いてあった。「あれや！父ちゃん見えるぜ。」兄ちゃんが叫んだ。中庭を挟んでだが五階の駐車場から見える。渡した父ちゃんの携帯に電話して「父ちゃん窓から駐車場見て！今直ぐに。」よたよたした足どりで身体を前屈みにした。父ちゃんが私らを見てくれた。笑って手を振り「よう気が付いたな。見えるよ顔わかる。仲良くせい。けんかせんようにな。ありがとう。」それから退院の日まで毎日父ちゃんに手を振りに行った。双眼鏡も持って行った。他の人から何見てるのか怪しがられる事もあった。退院した夜、父ちゃんが「うれしかったよ。」言ってくれた。私達も「よかったね。いつもは言えなかった。父ちゃんありがとう。」父ちゃんは家でも数日休養してから仕事に復帰した。入院前よりは少し早く帰って来て「節電だ。」と、やっぱり切りまくっている。だけど今はいやじゃないよ、うざくないよ。話せる時にいっぱい話しとかなきゃね。父ちゃんお仕事お疲れさま。いつもありがとう。